

樺太からの引き揚げと戦後のくらし

永澤 浪子

私は樺太^{からふと}の真岡町^{まおかちょう}の生まれ。戦争中は食べる物も着る物もない中で、いつまで戦争を続けるのかと思っていた。ただ、そんなことを口に出したら憲兵に引っ張られる。しかし父親も酒を飲むたびに、日本は負けると言っていた。

もともと父親は美唄の生まれだったが、農家の九男であったので農家を継げず、街へ出て電気関係の会社に入った。そこで樺太行きを告げられ、樺太で生活するようになったそう。それを聞かされた時は、北海道は暖かいのになんで寒い樺太に来たのかと思った。ただ、樺太の自宅は会社の社員住宅だったと思うが、建物内は暖かかった。他の家などは、ストーブを真っ赤に焚^たいても寒かった。電気関係の会社の社宅だったので、住環境は恵まれていた。

二人の兄は、大学へ行き徴^{ちよう}兵^{へい}された。下の兄は志願兵だった。上の兄は海軍で、下の兄は陸軍だった。前線には行かなかったが、新兵教育で毎日顔が腫^はれるほど殴られたそう。

昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日の終戦を迎えるとすぐに、ソ連軍がウラジオストクから樺太に何千人と侵攻してくるという話になった。さらに、女は皆、ロシア人のなぶりものになるから早く逃げろと言われた。

日本本土への引き揚げのため、港まで行ったが、誰もが多くの荷物を背負っていたが、荷物を捨てなければならないとのことだったので、夏の暑い最中、5 枚も 6 枚も重ね着して、荷物を減らして見せたりもした。18 日に稚内へ上陸した時には、これで助かったと思った。ただ、稚内では住む家も食べる物もなく、大変困った。

憲兵 (けんぺい)

日本軍において、陸軍の管轄 (かんかつ) に属し、軍事警察、行政警察の役割を担った職。反戦思想の取り締まりも行った。

父親の故郷の美唄にすぐにでも行きたかったが、汽車は無料だったものの、動いてもすぐに止まり、1日かけてもあまり進まず、途中の駅で、皆で雑魚寝した。ニシンを干したものや、カンダラを少し持ってきていたので、家族で分けた。結局2日くらいかけて美唄へ着いた。美唄についてから、あらためて自分たちを見てみると、体中にシラミが沸いていた。

農家であった親戚の家へ着いた後、農作業の仕事を手伝って、食べ物を貰う生活をしていった。ただその家には、自分たちの家族が住むような別棟などはなく、馬小屋に寝泊まりした。他にも道端の雑草を、防空用の鉄 兜 で煮て食べた。その後、離農して空き家になっていた家に住み込んだが、そこには鍋釜一つ布団一つなかった。親戚に鍋や布団を借り、藁を貰ってきて、それを敷いて布団をかけた。藁は意外と暖かいものだ。

樺太から北海道に来てから、かつての樺太の頃と同級生などには、誰一人会うことはなかった。日々の食べ物を確保することに精いっぱいだった。茶碗を3つか4つ、親戚から貰ったりしたが、それでは足りず、どこから持ってきたのかはわからないが、ホタテの貝殻を皿代わりにした。食事は大根の菜っ葉や芋の汁、ご飯は皿に盛りきり一杯のみだった。昭和30(1955)年ぐらいまではそんな生活が続いた。

美唄に来てから上の兄は高校の教員になった。下の兄は三井の炭鉱に入った。妹は女学校を出ていたので、代用教員として英語を教えた。しかし、自分が英語を習っていないのに生徒に英語は教えられないと言って、その後大学へ入った。さらに生きた英語を学びたいと、戦後アメリカへ行き、そのまま永住してしまった。

今でも樺太を逃げ出す時の夢を見る。故郷の海を思い出す。樺太の真岡にあった王子製紙で働いていたが、引き揚げの混乱のため、樺太での賃金が未払いだったので、引き揚げ後にそのことを苫小牧の王子製紙の工場に連絡したところ、賃金を払ってくれた。その時、苫小牧で働いたらどうかと言われ、自分もその気になったが、母親に反対されてあきらめた。

しばらくして、農家の嫁に来ないかと縁談があったが、今まで手伝い程度にしか農業の経験がなく、不安だったため、その話は断り、炭坑で働いていた亡夫と一緒にあった。

(ながさわ なみこ 大正14(1925)年 旧樺太・真岡郡真岡町生まれ)